

演題番号：D14

脊髄疾患の治療中および治療後5ヵ月にそれぞれ脳疾患の診断を行ったフレンチ・ブルドッグの2例

○中本裕也^{1) 2) 3)}，左 亨祐¹⁾，松尾芽衣¹⁾，中本美和¹⁾

¹⁾ Neuro Vets 動物神経科クリニック，²⁾ 大阪公立大学獣医臨床センター，³⁾ 京都大学

1. はじめに：フレンチ (F)・ブルドッグは日本国内における人気犬種だが、神経疾患を発症することが多い。脳疾患では脳腫瘍、脊髄疾患では椎間板ヘルニアや脊髄くも膜憩室などが好発する。今回、胸腰部脊髄疾患に対する治療中または治療後に脳疾患が判明した2症例に遭遇したため、その概要を報告する。

2. 材料および方法：症例1はF・ブルドッグ、8歳8ヵ月齢、避妊雌、8.6kgで既往歴は認められなかった。4ヵ月前からの両後肢の歩行異常を主訴に主治医を受診し、当クリニックへ紹介来院した。症例2は、F・ブルドッグ、4歳6ヵ月齢、未去勢雄、11.5kgで既往歴は腓炎と膿皮症だった。急性発症した両後肢の歩行異常を主訴に主治医を受診し、当クリニックへ紹介来院した。

3. 結果：症例1における初診時の診断結果は脊髄くも膜憩室であった。外科的治療実施後の通院期間中、てんかん発作を呈したとの稟告から頭部MRI検査を実施したところ、脳腫瘍を示唆する所見が認められた。診断後約7ヵ月で発作重積にて死亡した。症例2における初診時の診断結果は胸腰部椎間板ヘルニアであった。外科的治療によって臨床徴候が改

善したものの、その約5ヵ月後にてんかん発作を主訴に再来院したため頭部MRI検査を実施したところ、脳腫瘍を示唆する所見が認められた。診断翌日に発作重積を呈し、安楽死となった。2症例とも、てんかん発作を除いて脳障害を示唆する神経学的異常は事前に認められなかった。

4. 考察および結語：今回遭遇した2症例は、脊髄における臨床徴候を主訴に紹介受診し、その治療過程あるいは治療終了後にてんかん発作を呈した。前頭葉吻側領域における病変では、脳障害を示唆する初期の臨床徴候としててんかん発作のみを呈することも珍しくない。また、脳疾患では臨床徴候発現時点で病変部の拡大が認められることも珍しくない。このため、早期に病変を発見することは、治療を行う際にも飼主と一緒に動物と過ごす際にも有益であると考えられる。脳腫瘍はF・ブルドッグにおいて好発する脳疾患であるため、脊髄疾患で来院した場合であっても麻酔下での状況が安定している場合には、頭部の画像評価を併せて実施することが望ましいかもしれない。